
キミドリちゃん

藤波綾綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミドリちゃん

【Nコード】

N5328W

【作者名】

藤波綾綺

【あらすじ】

キミドリちゃんはメジロだ。それもすごく長生きの。キミドリちゃんは鳥なのに頭がすごくいい。そんなキミドリちゃんとあたしの日々。

え、俺のライバルは小鳥?! な青年も(そのうち)登場予定。

キミドリちゃんの好物

キミドリちゃん、はあたしの友人兼ペット兼精神安定剤みたいなものだ。

幼いころからずっと一緒にいるともだち。
羽がきれいな黄緑だからキミドリちゃん。

キミドリちゃんは、ちゃん付けで呼ばないと返事をしてくれない。
なかなか賢いと思う。

そんなキミドリちゃんはたぶん、メジロ。
たぶん、とつくのはメジロにしては長生きだし、いまだにぴんぴんしているから。

今は、メジロは飼っちゃいけないみたいだけど、あたしが生まれたときは登録さえすればメジロもペットとして飼ってよかった。うちのキミドリちゃんはあたしが生まれた年にうちにきたからあたしと同じ年。今年、20歳になる。メジロの平均寿命は7〜8年くらいらしいから、それからすればすごい長生きだ。もしかしたらメジロだとあたしたちが思っているだけでメジロではないのかもしれない。

それでもそんなに長生きしている鳥は珍しいと思うけど。

先日まであたしは両親とキミドリちゃんと一緒に暮らしていたのだけれど、このたび、一人暮らしをすることになった。

キミドリちゃんはどうする？と聞いたら、

「チーチーチュルチュルー」と鳴いたから、これは一緒に来たいってことだと勝手に解釈して晴れてあたしとキミドリちゃんはいっ

しよに生活することになったのだった。

キミドリちゃんのいいところは鳥だったこと。

うちのキミドリちゃんは本当にかしこいから足環はつけているけれど、それ以外はなんにもつけていない。一応寝るとき用の鳥かごが家にはぶら下がっているけれど、キミドリちゃんはトイレと、寝るときと、水を飲むときくらいしか鳥かごには入らない。普段は自由にかのなかを飛び回っている。

歩くわけじゃないから散歩というのとはちょっと違うのかもしれないけれど、あたしが外を歩くとき、キミドリちゃんは気分が乗れば一緒についてくる。

キミドリちゃんの意外な好物を見つけたのは、いつもの通り、あたしが散歩にをかけてそれにキミドリちゃんがついてきた日のことだった。

その日は休日だったから、ちょっとだけおしゃれして、一人暮らしを始めた街をぶらぶらあてもなく歩くつもりだった。

とはいえ、まったく知らない街ではない。ここにはあたしが通う大学もあるから。

スーパーとかも一応どこにあるかは知っていた。友だちとかとパーティーするときにスーパーで買い物したことがあるのだ。だから一人暮らしに必要な情報はちゃんと知ってる。

だからぶらぶらするのは暇つぶしの意味も兼ねているのだ。それに最近ちよつと太ったかなと思うし。

別にあたしはぼっちゃりというわけでもなく、どちらかといえば、痩せているほうだとは思うけれど、気を抜くとすぐに太るのには変わりがないわけで。ここんところ、ストレスを理由に夜、甘いものを食べたりしてたのがいけなかったんだろう。

そこで趣味と実益を兼ねた散歩、というやつだ。

出かけるときに、キミドリちゃんは どうする？ と聞いたら、

「チーチュルー」という返事が返ってきた。

そしてあたしの肩に止まって、もう一度、

「チーチュルー」と鳴いた。出発進行、という合図だ。

ふらふら歩いていたら、お昼の時間になっていた。

このままいちど家に帰ってもいいけれど、いい匂いが辺りに立ち込めている。

いい匂いにつられるように歩いていくと、こぢんまりとしたカフェらしきものがあつた。

ドアを開けて中に入ると、当然のようにキミドリちゃんも入ってくる。

キミドリちゃんは小さな羽をばたばたさせながら、飾り棚にちょ

こんと止まった。

メニューをみたらどうやらここは民家風カフェらしかった。
とりあえずランチセットを頼む。

上品な感じの初老の女性が運んでくれたお盆の上には小鉢が
三つとごはん、それからふわふわのオムレツが乗っていた。

小鉢のなかみは高野豆腐とオクラ、それから里芋のあんかけで、
どれも素朴だけれどおいしそう。

早速、いただきます、とあいさつをしてからお箸を動かした。

どれもやさしい味がしておいしかったのだけれど、ここの素晴ら
しいところはそれだけじゃなかった。

ご飯を食べ終わったのを見計らって、デザートとお茶を出してく

れたのだ。

デザートは牛乳カン、お茶は黒豆茶だった。

飾り棚でおとなしくしていたキミドリちゃんは、そこで急にあたしが座っていたテーブルにやってきて、あたしの二の腕をつんつんとくちばしでつついた。

小さなくちばしだけど馬鹿にしちゃいけない。

先っぽはとがっているからこれが案外痛いのだ。

キミドリちゃんの方を見ると、キミドリちゃんの視線は黒豆茶の入った湯呑にくぎ付けだった。

飲みたいのだろうか。湯呑を少し持ち上げるとキミドリちゃんのちいさなちいさな頭が動く。

キミドリちゃんの頭が上下に動くのを見るのは、可愛くて和むのだけれど、あまり湯呑を上下に動かしてキミドリちゃんの頭を上下に動かすわけにはいかない。あたしがそんなこととして和んでるなんて知ったら、ちいさな鋭いくちばしであちこちをつんつんされるのは間違いない。

お漬物用に、と置かれていた小皿に湯呑に入っていた黒豆茶を少し注いであげる。

黒豆茶って小鳥にあげていいもんだろうか、と少し悩んだけど、黒豆だし、イソフラボンだし、きつと悪くはないだろう。それにキミドリちゃんが自分で飲みたいと言ったのだから、大丈夫なはず。

キミドリちゃんはじっとお皿を見つめ、それからちろちろ、と黒豆茶を飲んだ。

「チーチーチュルチュルー」

キミドリちゃんは実にご機嫌だ。

びっくりしていたのはむしろ、他のお客さんだとかこのお店の店

員さんだとか。

犬とか猫とかならふつつ、お店の中には入れないでください、と言えるんだろうけど、何せ鳥。

しかも小さなメジロなのだ。

キミドリちゃんって本当にお得だね、と思うのはこんなとき。

小さなメジロを見て怖がる人はあまりいないし、近づくと思われているらしく、誰も何も言わないし、寄ってこないのだ。だからキミドリちゃんは好きなように行動できる。

キミドリちゃんはかしこい子だからきつとそんなことだってわかっているはずなのだ。

小皿に入れた黒豆茶にキミドリちゃんは大変満足したらしい。

もう一度、

「チーチーチュルチュル」と鳴いてからぱたぱたとまた飾り棚へ。

どうやらあたしが自分の分の黒豆茶を飲むまでは待っていてくれるらしい。それとも他に要望でもあるのか。

キミドリちゃんの要望はそれからすぐ、わかることとなった。

レジのところに黒豆茶が売ってあったのだ。

あたしが自分の黒豆茶を堪能し終わって、ほっと一息ついてから立ち上がるのを見計らってキミドリちゃんはパタパタと羽を動かして、ちょこん、と黒豆茶が並んでいる籠にとまって見せた。

しかも小首をかしげている。

なんて賢しい！かわいらしいと自分でわかっているのだ、このキミドリちゃんは。キミドリちゃんは鳥のくせに全然鳥頭なんかでは

ないのだ。外側はメジロだけどきつと中身は別のもののできてるんだと思う。

あたしがお金といっしょに黒豆茶のパックを一つ差し出すと、キミドリちゃんは当然、だともいうかのように「チュル」と一声鳴いた。誰だ、この小鳥をこんなに甘やかして育てたのは！と内心憤慨してみせるけれど、うちの家族でキミドリちゃんに厳しい人間なんていないのだ。がっかりする。だって可愛いんだもん。仕方がない。いくら中身が鳥頭じゃなくて計算高い小鳥であつても可愛いものは、可愛い。ほんと、どうしようもない。

下手したら、あたしがいちばんキミドリちゃんに甘いのかも知らない。

「ありがとうございます。また、いらしてくださいね、かわいらしい小鳥さんと一緒に」

カフェを出るとき、そんな一言までもらってしまった。店員さんのひとことに返事を返したのは勿論、キミドリちゃんだ。

ひとときわ可愛く、「チーチーチュルチュル」と鳴いてみせた。そしてパタパタと飛んで行ってしまった。

「あらあら、大丈夫なんですか」

「はい。気まぐれな小鳥なので。夕方になったら自力で帰ってきてますよ」

「まあまあ、かわいらしい上に頭もいいのねえ」

「そうですねえ」

だから困るんです、とは口に出せないまま苦笑していると、店員さんはでもまたうちにいらしてくださいね、今度は小鳥さんにも何か用意しておきますから、と言って見送ってくれた。なんともまあありがたいことだ。

こうして、このカフェはあたしとキミドリちゃんの行きつけになり、このカフェを通していろんな人と知り合うことになるのだけれど、それはまた別のおはなし。

これはキミドリちゃんとあたしが過ごした日々のものがたり。
黒豆茶が好きだという少しどころかものすごく変わったメジロが
起こす数々の騒動はまだ始まったばかり。

キミドリちゃんの好物（後書き）

調子に乗って連載を始めました。一話完結でなるべく終わるような話になると思います。あまり更新できないかもしれませんが、のんびりお付き合いくださいませ。

キミドリちゃんの勘違い

「おはようございます」

「おはよう。今日も暑くなりそうですね。器を少し大目に冷やしておいてくれる?」

「はい。小皿でいいですか?デザート用の」

「ええ。今日のデザートはソラマメのアイスにしようと思ってるの」

「うわー、楽しみです」

「ふふ、そう言ってもらえると作り甲斐があるわ」

「じゃあ早速準備しますね」

「お願いね」

なぜ、こんな会話を交わしているか、というと。

いちど、キミドリちゃんと訪れた民家風カフェの名前は「榆の木」といって、いい感じに年を重ねた老夫婦が経営しているカフェだった。

あれから何度かランチを食べに来たりしていたら、店員さんである奥さんが「あなた、ここでバイトしてみない?」と声をかけてきて、まあその流れでここでバイトすることになったのだった。

家から近いし、まかないもおいしいし、キミドリちゃんもものすごく気に入っているようなので、何の問題もない。

あたしは今、大学3年生でふつつなら就活とかで忙しいのだろうけれど、あたしは大学院への進学を希望しているので、そう忙しくもないのだ。なので空いた時間でちょこちょこバイトさせてもらっている。

カフェ「榆の木」はマスターが飲み物を、奥さんが料理を担当している。キミドリちゃんお気に入りの黒豆茶はマスターの弟さんが作った黒豆からできていると聞いた。

キミドリちゃんはひとりでよくよくこのカフェに来ていたらしく、今や常連さんたちのアイドル状態。衛生面で店内をキミドリちゃんが飛び回るのは問題があるということで、外のテラスにキミドリちゃん専用止まり木と黒豆茶用湯呑がおいてある。最近、昼間になったら姿を消しているな、と思ったら黒豆茶を飲みにかフェを訪れていたらしい。ただけ黒豆茶が好きなんだ、とあたしがっこみたくなったのも無理はないと思う。

さて、仕事はともかく、キミドリちゃんのここでのお仕事は、カフェを訪れるお客さんたちに愛らし仕種をふりまくことだ。

キミドリちゃんのお仕事の大家は黒豆茶。だいすきなお茶がもらえるのと知っているキミドリちゃんはそりやもう可愛らしい仕種の大盤振る舞い。ずっと一緒にいるあたしですら、キミドリちゃんのそんな愛らしい姿はそうそうお目にかかったことはない。つまり、キミドリちゃんは黒豆茶だけじゃなくて、このカフェも大好きなんだと思う。

キミドリちゃんは今日もカフェのテラス席にいる。まだ仕込みの時間でお客さんがいないせいか、キミドリちゃんは呑気に黒豆茶を堪能中。キミドリちゃん専用湯呑の横には小さな白いコップが置かれていて、ごはんの時間になると、そこに果物やらキミドリちゃんが普段食べている餌やらを奥さんがいれてくれる。なんというか、本当に至れり尽くせりで、申し訳によような気分になる。

カラン、カラン、と軽快なドアベルが鳴って、お客さんが入ってきた。カフェ榆の木に来るお客さんの多くは常連客だけれど、大学の近くということもあってか若いお客さんも多い。最初のお客さんもどうやら大学生のようだった。

どうも昼休みと次のコマがあいていてゆっくりランチができるらしい。話の内容から1、2年生だろうなという感じ。去年のことなのになんだか懐かしい。

一組目のお客さんを皮切りに次々、お客さんが入ってくる。そう広くもない店内だから、あつという間にいっぱいになってしまった。奥さんが料理を作って盛るので、それをひたすら運ぶ。お昼のメニューはランチが二種類あるだけなので、結構楽ちんだ。

ちょっと前までは、もう少しメニューの数もあったらしいのだけれど、奥さんとマスターだけじゃ回せないし、ランチメニューを注文されることの方が圧倒的に多かったとかで、あたしがバイトに入ったときにはすでにランチメニューはランチセット二種類になっていた。

メニューが少ないといっても、お昼時はやっぱりそれなりに混む。キミドリちゃんがテラスの定位置で店内に流れている音楽に合わせてチーチー言っている声を後目に、あたしはくるくると働いていた。

ようやくお昼が終わると、小休止。マスターたちとまかないをささと食べ、その後、いわゆるデザートタイムに入る。デザートタイムは基本的に予約のお客さんだけなので気が楽だ。予約表を見る

と、今日の予約客は、おなじみの森田さんという常連客。少しほつとした。新規の客よりもおなじみのお客さんの方が好みなど事前にわかる分、いろいろやりやすいのだ。

+
+
+

森田さん、という女性は奥さんと同級生らしく、よくカフェ楡の木に来て下さる常連客だ。なんでもお花の先生をしているとかでいつもぴしつと和服を着ていらつしやる。そして、この森田さんはキミドリちゃんの大ファンなのだった。

いつも森田さんがカフェ楡の木に訪れるときは、森田さんにお花を習っている生徒さんたちと一緒にいるが、今日の予約人数は二人おや、と思うけれど、とりあえずテラスの見えるキミドリちゃんにいちばん近い席のテーブルセットイングをする。

白いテーブルクロスにシルバーのカトラリーがよく映える。カトラリーをゆっくり並べるのがあたしは好きだった。パーティーが始まる前の興奮とちょっと似ている。

そのほかにもいろいろやることがあって、そういことをやってい

るうちに、カラン、カランと再び軽快な音が聞こえた。

「いらつしゃいませ」

「ふふふ。今日は息子と一緒になの、よろしいかしら」

「もちろんです。今日もどうぞお楽しみください」

森田さんの後ろから現れたのは背高のつばの男性だった。見たところ、20代後半から30代前半といったところか。

森田さん親子を席に案内して、飲み物のメニューをお渡しする。
お冷とおしぼりをお渡しするのも忘れない。

少し時間をおいて、お決まりでしょうかと聞くと、森田さんは紅茶、息子さんは抹茶入り玄米茶をという。

「お飲み物はデザートと同時ににお出してよろしいでしょうか」

「ええ、それでいいわ。今日のデザートは何？」

「米粉のシフォンとソラマメのアイスです」

「シフォンに生クリームはつく？」

「もちろん。あと栗のソースもつきますよ。すべて手作りですのでご期待ください」

「ふふ。いつ来てもおいしいから嬉しいわね」

一通り注文を済ませたあと、息子さんはのんびり座ってお冷を飲んでいけれど、森田さんはすぐに立ち上がってテラスへと出た。森田さんはキミドリちゃんが大のお気に入りなのだ。

そんな母親の姿を見て、不思議に思ったのか息子さんもテラスへと出たようだった。店内からテラスへと出るためのドアがばたん、と閉まる音がしたから。

森田さんがキミドリちゃんを構うのはいつものことだし、キミドリちゃんも嫌がってはいないようなのでそのままキッチンに引っ込

んでいたら、「痛っ」という声が聞こえた。

「どうかなさいました？」

あわてて、テラスへと出ると、キミドリちゃんがなんと息子さんの手をくちばしでつついていた。

「ああああー、ごめんなさい。すみません。キミドリちゃんっ、勉つとむくんじゃないのよっ。ごめんなさい、大丈夫ですか」

キミドリちゃんを息子さんの手から引きはがし、あたしの肩に乗せる。キミドリちゃんはあたしが羽を触るのを嫌がるけれどこういうときばかりは我慢してもらわなきゃいけない。

「こらっ」

キミドリちゃんを叱ると、キミドリちゃんは小首を傾げて「ちー」と鳴いた。

「いや、だから、勉くんじゃないって。勉くんは喜んだかもしれないけれど、あれは勉くんがおかしいのであって、普通は喜ばないからね。ほら、謝りなさい」

「ちーちー」

ぺこぺこと息子さんに頭を下げていると、話し声が聞こえたのか奥さんもテラスへとやってきた。

「ごめんなさいねえ、血とかは出てない？」

「あらあ、いいのよ、このくらい。こんな見慣れないデカブツがいきなりきたからキミドリちゃんも驚いちゃったのよねえ」

「デカブツってそんな。はあ、ああ、でもびつくりしたくらいでもう痛くないんでそんなに恐縮しなくて大丈夫ですよ」

息子さんは森田さんに苦い顔を見せてから、こちらを向いてもう気にしないでください、と笑顔で言ってくれた。

「本当にごめんなさい。どうも、キミドリちゃんの知り合いに似て

て。それでその知り合いがキミドリちゃんにつつかれると喜ぶような変態でして。喜ぶと思っただけ。ちゃんとやってきかせておきますから」

「へえ、母さんには聞いてたけど、本当に賢そうな鳥だなあ。メジロだね？」

「だと思えます。その割には長生きだし、猫と仲良しだし、微妙だけど。登録はしてありますよ」

「そっか。メジロって登録しないと飼えないんだよね」

「ええ。今はもう登録も難しいらしいですけど」

森田さんの息子さんは、友成さんというらしい。なんでも写真を撮るのが趣味で、母親に賢いメジロがいる喫茶店があると聞いて興味があったんだとか。それなのに、つつかれるなんてなんてかわいそうなんだろうと思わずにはいられない。

今日の予約客は森田さん親子だけだったので、いろいろお話しさせてもらった。せっかく親子で来ているのに二人で話さなくていいのだろうか、と心配だったりしたのだけれど、森田さんは、こんなデカブツと話しても面白くないわよう、と豪快に笑い飛ばしていた。そして、奥さんとおしゃべりしていたので、本当に息子さんと話をしなくてもよかったみたい。

その日、帰る前に友成さんがキミドリちゃんの写真を撮りたいと言って、何枚かパシャパシャやっていた。キミドリちゃんは写真に慣れているので驚きもしない。それどころかわいらしく見えるようにポーズを取っていたようだ。たぶん、勉強と勘違いでつついてしまったお詫びなのだと思う。

この日、友成さんが撮った写真がちょっとしたところで噂になり、キミドリちゃん目当てにカフェ「榆の木」に訪れる人々が増えるのはちょっと先の話。

たいていはこんな日々。

キミドリちゃんの勘違い（後書き）

キミドリちゃんの2話目です。なんかぐだぐだですが、次の話もおそらくぐだぐだ。こんな感じで平和に続いていきます。猫との話はブログにて。

キミドリちゃんお祭りへ

「お祭りいかない？」

なにも考えず、誘いに乗ったのはまずかったかもしれない、と思った。

カフェ「榆の木」の常連さんである森田さんのご子息、友成さんにお祭りに誘われたのはつい先日。

なんでもお祭りに興味はあるのだけれど、一緒に行く人がいなくて困っていたのだという。

確かに三十近くの男性が一人でお祭りに行く、というのは少タイタイものがある。

なので、あたしでよければ、と快く承諾したのだった。

キミドリちゃんにつつつかれたにも関わらず、友成さんはよくカフェ「榆の木」を訪れていた。もともと動物が好きらしい。キミドリちゃんにどんな扱いをされようと嬉しそうにキミドリちゃんにあいさつする友成さんの姿は、若干某知人を彷彿とさせる。キミドリちゃんはどうとう友成さんにはどんな攻撃をしかけても平気なんだと思っているようで、いろんな攻撃をしては楽しんでいる。メジロってそんな鳥だっけ、と思わないでもないけれど、キミドリちゃ

なんてどうせ普通じゃないのだから、悩んでも仕方がない。なにせ猫と仲良くなるような鳥だ。最近、猫団子に囲まれて暖かそうに寝ているキミドリちゃんを見て、うらやましくなったのはここだけの秘密だ。くう、うらやましい！

友成さんがカフェに来ることが増えたから、あたしも話す機会が増える。しかもキミドリちゃんを見張っておかないと、時々キミドリちゃんがつつきすぎて流血沙汰になることも多いので、下の名前で呼ぶくらいには仲良くなった。変な気負いなどもいらないので、それなりにいい関係を築けていると思う。

当日、昼。

友成さんとの約束は夕方の5時だからまだ時間はある。浴衣着ようかなあ、でも浴衣とか気合い入れすぎかなあ、とそんなことをぼんやり考えながら昼食を食べていた。

キミドリちゃんは今日は珍しく、うちにいる。あたしが休みの日でもキミドリちゃんは自由気ままな生活を送っているので外に出たがるのもしょっちゅうなのだ。

だからキミドリちゃんが家にいるのは案外珍しい。

「あ、そうだ。キミドリちゃん、あたし今晚出かけるから、お留守番よろしくね」

夜出かけるとき、キミドリちゃんはお留守番だ。鳥であるがゆえにキミドリちゃんは当然、鳥目で夜飛ぶことはできない。そこで、

基本的に夜出かけなければいけないとき、キミドリちゃんはお留守番だ。どっちにしろその時間帯には眠たいようだし、夜出かける気にはならないので大人しくお留守番をしてくれる。

ところが、だ。

今日のキミドリちゃんはいつもと違った。

「ちーちーちーちゅるるー」

キミドリちゃんがさつきから抗議の声を上げている。

「えー、キミドリちゃんも来たいの？」

そう尋ねると、キミドリちゃんはわが意を得たり、というようにひとときわ高く、「ちー」と鳴いた。

「でも、キミドリちゃん、鳥目じゃん。夜、見えないでしょ？それに人ごみ嫌いだし。お祭りは人ごみだよー？」

「ちーちーちーちゅるるー」

説得しようにも、キミドリちゃんは頑として納得しようとしなない。だから、籠のなかでおとなしくしていること、を条件にあたしはキミドリちゃんを連れて行くことにした。あたしがキミドリちゃんに甘いのは今さらだ。キミドリちゃんもそれは十二分にわかっているのだから性質が悪い。

結局、キミドリちゃんを連れて行って、問題があったらすぐに対処する必要がある、ということと動きにくい浴衣はあきらめて、ジーンズとＴシャツ、それに薄手のパーカーというなんともほほな恰好で友成さんとの待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせの場所は、地下鉄の駅から少し離れたところにあるコンビニ。地下鉄の駅は出口がいくつもある上に、ちょうどお祭り会場のど真ん中に位置しているため、待ち合わせ場所としてはあまりいい場所とはいえないためだ。その点、コンビニなら涼しいし、わかりやすいところにあるから、問題なく合流できるはずだ。

「お待たせ」

ものの数分もしないうちに友成さんが現れた。こちらも白ポロシャツにジーンズというラフな格好だ。

「やっぱり人が多いね。思ったより多くてびっくりした」

「このコンビニ、すぐわかりました？」

「うん。とりあえず、地上に出てから考えようと思ってたら、すぐに見つかったよ」

「それはよかったです。人が多いんですけど、まずお参りしましよ
う」

「そうだね。と、言っても俺はここらへん、全然わかんないから任せるよ。今日はキミドリちゃんはお留守番かい？」

「そのつもりだったんですけど、来たいっていうんで、一応籠にいられて連れては来てます。さっき、寝ちゃったみたいだけど」

そう、キミドリちゃんは籠の中が暗かったせいか、ゆらゆら揺れる振動が眠気を誘ったのか、いつの間にかちゃっかり寝ていた。寝るんだったらやっぱり連れてこなきゃよかった、と思ったけど、置いてけぼりをくらったとキミドリちゃんが知ったときに、どんな報復をされるかわからない。キミドリちゃんは本当に賢すぎるくらい賢い鳥だから。

「ははっ。キミドリちゃんもお祭り気分を味わいたいのかな」
「こんなに規模が大きい祭りでなければまだ違うんですけど」

人ごみにまみれ、なんとかお社にたどり着き、お浄めをしてからお参りをする。お賽銭箱の上に、礼拝の仕方が書いてある木の札が立ててあって、これは案外ありがたい。

二人でお参りをして、そのままお社を出る。そうすればあとはずらっとひたすら屋台が立ち並ぶ道があるだけだ。

たこ焼き、お好み焼き、焼き鳥、焼きいか、リンゴあめ、わたあめ、かき氷などの定番は勿論、菖蒲や梅が枝餅なんかも売っている。とりあえずカオスだ。

ヨーヨー釣りや金魚すくい、射的などは別の広場みたいなところにまたスペースがあって、そこにそういった類の屋台が並んでおり、その奥にはお化け屋敷もある。

お化け屋敷の入口では、おじいさんが慣れた様子で口上を述べている。あんまり、怖そうじゃないけれど、中からきゃー、という悲鳴が聞こえてくるからそれなりに楽しめるのだろっ。

金魚すくいの横には、亀すくいとうなぎすくいまであって、なんでもござれ、といった感じだ。うなぎすくいのところにはいい年した大人たちが無理やり難しい顔をしようとしたけれど失敗して楽しそうな雰囲気隠せていないふわふわした空気を醸し出している。案外、こういうのは大人のほうがはまるのだろう。

友成さんは見るものすべてが珍しく映るらしく、きよろきよろとしている。あたしは何度かこのお祭りには来たことがあるのでそう珍しいものがあるわけでもないが、たまに去年までは見かけなかったような屋台があったりして、それはそれで面白い。祭りっていうのはもう雰囲気そのものが面白いのだ。

「なんか、食べます？」

「やつぱお祭りといえば粉ものだよな。でも、この人の多さじゃ食べるのも大変だよなあ」

「あはは。でも、お店によつては食べるスペースを設けてるところもありますし、お社の後ろはちょっとした穴場スペースもありますよ」

「おうしつ、じゃあいろいろ買って、穴場で食べよう。なんか食べたいものとかあったらじゃんじゃん言って」

「わーい」

二人でいろいろ買い込んで、穴場スペースへと向かう。お祭りのおかげでそれなりに明るいし、何より、座って食べられるのがいい。お好み焼きにたこ焼き、焼き鳥にりんごあめ、綿あめ、かき氷、冷やしマンゴー、から揚げ、焼きまんじゅうにソーダ。これでもかと買い込んだそれらを石段に並べ終えて、さあ食べようとしたところで、「ちー」という弱弱しい声が聞こえた。

「キミドリちゃん？」

籠バッグを開けてのぞいてみると、キミドリちゃんは何時の間に起きていて、ばさばさつと飛び出してきた。

いきおいよく飛び出したのはいいものの、キミドリちゃんは鳥だけに鳥目。すぐにふらふらとして、鳥としてはあるまじく、どてんと落下した。

それが家での落下なら問題なかっただろう。

しかし、運が悪かった。

キミドリちゃんは湯気がもくもくとたちあがるお好み焼きの上に落下してしまったのだ。

「ちーっ」

キミドリちゃんは素早く鳴いて、再び飛び上がろうとした。しかし、鳥目な上にお好み焼きの上に落下したため、羽にはべとりソースとマヨネーズ、青のり、かつおぶしが付着している。人間にとつてはなんてことないのだけれど、キミドリちゃんのような小さな鳥にとっては大変な負担である。

あたしは慌ててキミドリちゃんの体を持ち上げようとしたのだけれど、少しだけタイミングが遅かった。キミドリちゃんは完全なパニック状態で羽をばさばさとしてどうにかしようとしている。火事場の馬鹿力というのは鳥にも適用されるのか、キミドリちゃんが低空飛行をしたおかげで、ラムネがこぼれ、から揚げは階段をころころ転げ落ち、友成さんに激突して、キミドリちゃんは失神。真っ白なポロシャツがキミドリちゃんのせいで、ソースまみれだ。青のりや鰹節まで付着していて、もう、なんといつていいかすらわからない。

+
+
+

そのあと、どうなったかというところ、ひたすら友成さんに謝り倒していつかこのお詫びは絶対に、と固く誓って、急いで家に帰った。キミドリちゃんの羽を洗ってやるためだ。

鳥の羽というやつはとてもデリケートなのでそれ専用の洗剤を使っ
てやらないとダメなのだ。お社には水道があつたけれど、専用洗
剤なんて持つてきているわけもなく、ミニタオルにくるんで家まで
連れて帰った。キミドリちゃんは久しぶりのシャンプーが気持ちよ
かったらしく、ご機嫌だった。がこっちは散々だ。もう二度と、キミ
ドリちゃんを連れてお祭りには行きたくない。

そして後日。

あたしが友成さんというところを大学の友人に見られていたらしく、
「彼氏？」としつこい追及を受ける羽目になるなんてこと、あ
たしは予想できていなかった。

お祭りに行くときは、よく考えてからにしよう。

キミドリちゃんお祭りへ（後書き）

実際のお祭りをイメージしてみたんですが。季節外れですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5328w/>

キミドリちゃん

2011年10月25日16時00分発行